

枝川古墳群

(高知県伊野町)

昭和60年3月 1985

伊野町教育委員会

序

伊野町枝川の古墳群は、琴平山の南西丘陵斜面に位置し、6世紀末から7世紀前半の横穴式石室であることがそれぞれの発掘調査で確認され、ここに報告書として刊行する運びとなりました。

この調査は、私達をとりまく環境変化のなかで古墳群の保存を目的として実施したものであります。

本調査にあたりましては、高知女子大学 岡本健児先生、高知県立日高養護学校 廣田典夫先生、高知県文化振興課 山本哲也主事、伊野町文化財調査委員の方々をはじめ御協力を戴きました関係地主の皆様方に深く感謝申し上げますと共に、この報告書が考古学及び郷土史研究の貴重な参考資料として活用され、埋蔵文化財に対する人々の認識が深まるよう念じております。

昭和60年3月31日

伊野町教育委員会

教育長 端 寿

例　　言

- 1 本書は、伊野町枝川の琴平山にある枝川古墳群（1号墳、2号墳、3号墳）の発掘調査報告書である。
- 2 古墳名は、東方より枝川1号墳、枝川2号墳、枝川3号墳とした。
- 3 枝川古墳群は、3基とも形態をそのまま残しており、その点で貴重な古墳群と言うことが出来る。
- 4 発掘調査は、岡本健児先生（高知女子大学教授）を中心として下記の諸先生により昭和41年に1号墳、昭和47年に2号墳、昭和56年に3号墳の発掘調査を行った。

1号墳	高知県立小津高等学校教諭 高知県立高知ろう学校教諭 伊野町文化財調査委員 高知県立小津高等学校歴史班	岡本健児 廣田典夫 片岡鷹介
2号墳	高知女子大学教授 高知県立高知ろう学校教諭 伊野町文化財調査委員 高知大学学生 高知女子大学学生有志	岡本健児 廣田典夫 片岡鷹介 下村公彦
3号墳	高知女子大学教授 高知県文化振興課主事 伊野町文化財調査委員 立正大学学生	岡本健児 山本哲也 片岡鷹介 廣田佳久

- 5 報告書の作成は、下記の先生方に執筆を依頼した。

調査に至る経緯	伊野町偕楽荘所長	竹原清昭
1号墳	高知県立日高養護学校教諭	廣田典夫
2号墳	伊野町文化財調査委員	片岡鷹介
3号墳	高知県文化振興課主事	山本哲也
総括	高知女子大学教授	岡本健児

- 6 調査にあたっては、土地所有者 水田春梅氏、野中要氏に御協力をいただいたので記して感謝するものである。

- 7 出土遺物は、伊野町教育委員会が保管している。

目 次

I	調査に至る経緯	2
II	古墳群の位置	4
III	枝川1号墳	5
1	所在地と現状	
2	石室の構造と遺物出土状況	
3	出土遺物	
4	まとめ	
IV	枝川2号墳	10
1	所在地と現状	
2	石室の構造と遺物出土状況	
3	出土遺物	
V	枝川3号墳	14
1	所在地と現状	
2	石室の構造と遺物出土状況	
(1)	古墳の調査	
①	発掘調査の内容	
②	横穴式石室	
3	出土遺物	
4	まとめ	
VI	総括	20
1	古墳群の年代	
2	各号墳の横穴式石室	
3	仁淀川水系における古墳群	

図 目 次

第1図 古墳群の位置	1
第2図 1号墳石室実測図	8
第3図 1号墳出土遺物実測図	9
第4図 2号墳石室実測図	12
第5図 2号墳出土遺物実測図	13
第6図 3号墳遺物出土状況	17
第7図 3号墳石室実測図	18
第8図 3号墳出土遺物実測図	19

図 版 目 次

図版 1	1号墳全景	図版 9	3号墳石室石組み
図版 2	1号墳入口	図版10	3号墳玄室調査状況
図版 3	1号墳石室石組み	図版11	3号墳玄門部遺物状態
図版 4	1号墳銀環及び玉類	図版12	3号墳玄門部遺物状態
図版 5	1号墳須恵器及び鉄器	図版13	3号墳須恵器出土状態
図版 6	2号墳全景	図版14	3号墳須恵器
図版 7	2号墳石室石組み	図版15	3号墳出土遺物
図版 8	3号墳全景		



第二回の題解

I 調査に至る経緯

伊野町枝川地区にはいくつかの古墳がある、と昔から言われていた。しかも誰れも顧みるものではなく、半ば見捨てられたまゝ、いたずらに歳月を経てきた。その後、文化財を守ろうという一般的風潮は次第に輪を広げ、昭和35年伊野町文化財保護条例が施行されて、町内の文化財に対する認識が急に高まってきた。しかも町内在住の故上田虎介、岡本健児高知女子大教授両氏の斯界権威者を町文化財委員に迎えて一層の充実となつた。かくて町文化財調査委員会は発足と同時に、先ず紙関係と古墳を重点に取り上げ、精力的に調査を進めていった。

その結果、枝川地区には古墳が3基、接近して現存、正式調査を要望する声もあり、また保護の面からも石室側壁の積石破壊が懸念される現状にあることを確認した。一方八田地区にも古墳1基があつたが、戦後取り壊され、今は原形を見ることができず惜しまれてならない。

枝川古墳群は東から西へ順に1号墳、2号墳、3号墳と名づけられ、ほぼ東西の直線上約400m間に横穴式石室墳3基が並び、すぐ前方を国道33号線が3古墳に沿って走っている。

3古墳の羨道入口の向く方向はそれぞれ異っているが、岡本健児氏の持論によると、「その入口の向く方向がこの古墳に葬られた人たちの住いのあったところだ」という。特徴としてはわずか3基ではあるが古墳群を形成しているということである。

1号墳は、伊野町枝川石ヶ崎3132番地で所有者は水田春梅氏、町の最東端坪内坂の中腹部にあって、高知・伊野両市町界を目の先にし、さらにその東方間近には高知県指定史跡・朝倉古墳がある。

昭和41年3月発掘調査を行い、発掘責任者は岡本健児氏が担当された。

出土品は、人骨片、須恵器、玉類、ガラス製小環、銀環、鉄刀子、大刀鞘などで町に寄贈され、古墳と共に町文化財に指定されている。

2号墳は伊野町枝川2111番地、旧枝川小学校西側で所有者は野中要氏。旧小学校跡西北隅のすぐうしろにあり、1号墳とのへだたりは約200m。昭和47年8月に発掘調査を行い発掘責任者は岡本健児氏が担当された。

今までに何回か盗掘された形跡があり、出土品はわずかに須恵器、鐵鏡の数点であった。これも町に寄贈され、古墳と共に町文化財に指定されている。

3号墳は伊野町枝川板屋2231番地、枝川忠魂墓地前で所有者は伊野町。昭和56年3月発掘調査を行い発掘責任者は岡本健児氏で他に県教育委員会文化振興課、山本哲也氏、県文化財審議会委員、廣田典夫氏、また高知大学の考古学研究グループの諸氏、それに町教育委員会、文化財調査委員会の会員の方など多くの協力を得て発掘した。

3号墳は2号墳の西方約100mの地点にあり、比較的大石で築かれている。人家が密着しておりさらに羨道入口は急坂の石垣道となっているなど、地理的な悪条件のため発掘が遅れたもの。ここも數回盗掘がされた模様で出土品は極めて少なく、須恵器数点と鉄器1点にとどまった。古墳と併せて町文化財に指定されている。

調査全般にわたり高知女子大教授岡本健児氏の指導と協力を受け、また古墳・土地所有者、県文化振興課、高知大学考古学研究部、廣田典夫氏、町文化財調査会委員、その他関係者各機関の協力を得ましたので、茲に記し感謝いたします。

(竹原清昭)

II 古墳群の位置（第1図）

枝川古墳群は3基の古墳によって構成されている。古墳は高知市より国道33号線で西に約7kmの所に、高知市と伊野町の境に蛭内坂と呼ばれる、ゆるやかな坂道がある。蛭内坂はゆるやかではあるが、高知市朝倉と吾川郡伊野町との分水嶺になっている。蛭内坂は国道施設のため切取られ現在は標高20m前後の坂になっているが、古くは標高50m程の細長い峯で、南と北は繋がっていて1つの山丘であった。蛭内坂を越すと通称東浦、西浦、ウネ沢と呼ばれる地区へと、国道は西に走っている。蛭内坂からウネ沢方面へは、ゆるやかな下りになり蛭内坂との標高差は11.1mある。そしてこの西浦、ウネ沢には現在は住宅が密集する住宅地になっているが、古くは湿田地帯として知られていた地域である。

古墳は東浦の北側標高137.7mの金刀比羅山の南斜面に造られている。東から順に枝川1号墳・2号墳・3号墳と呼んでいる。

1号墳は高知食糧事務所前の旧国道ぞいで、西側標高22m、東斜面で枝川3132番地の水田家墓地内的一部に立地し、東南に開口している。

2号墳は枝川2111番地野中要氏所有地内にある。古墳は宇治團地電停前を北に約10mはいった東側で、標高24mの西斜面に羨道を西南に開口している古墳である。

3号墳は板屋2231番地伊野町の所有地内にある。古墳は2号墳の西約100mに位置し舌状台地のはば中央部で標高30mに羨道を南に開口する古墳である。

これら3基の古墳はすべて横穴式石室をもつ古墳である。

(廣田典夫)

III 枝川1号墳

1 所在地と現状

高知市より国道33号線で西に約7km、高知市と伊野町の境に蛭内坂がある。この蛭内坂を越した北側に、標高147mの琴平山がある。

この山の南斜面に3基の古墳がある。1号墳は3基の古墳の中では最も東にあり、蛭内坂を越えた所に旧国道が残っているがその近くで、伊野町枝川3132番地の水田家の墓地内にある。1号墳の玄門直上の天井石が羨道上にずれ落ち、その部所から玄室内が見える状態である。しかし玄室内には相当量の土砂が堆積しており、石室の状態ははっきりしなかった。なお羨道の先端部羨門近くは、道の工事がおこなわれた時に、一部切取られた形跡がみられた。

2 石室の構造と遺物出土状況（第2図）

墳丘は大体原形をとどめているが、玄室奥壁上部と玄門付近はそれぞれ墓地と、道路工事で削平と切取りがみられる。そして墳丘部には大小の樹木が繁り、現状では墳丘の実測は困難な状態であるが、墳丘の基底部はほぼ10m前後が考えられる。調査は前述の玄門天井石のずれ落ちている下の土砂の取り除きからはじめた。

石室は両袖式の横穴式石室で、石室石材は硅質砂岩である。これらの石材は遺跡周辺の山丘に多くみられるようである。

玄室の長さ3.21m、幅は最大部が玄門近くにあり1.48m、奥壁下で1.2mで玄門より奥壁に向ってやや狭くなっている。玄室内では玄室の長さは奥壁下の幅の2.5倍に造られている。羨道では羨門部が一部切取られているが、残存部の長さ1.2m、幅は玄門近くで1mである。玄室床面より天井までの高さは、奥壁近くで1.6m、玄門付近で1.35mとやや傾斜をもたしている。玄室の床面には、40cm×10cm、厚さ1cm内外の硅岩の平石をほぼ全面に敷きつめている。ただ床面敷石で玄門と羨道では一部剥き取られた形跡が見られる。玄室と羨道を区画する枕石は3個で、やや羨道部外よりに置かれていている。

石室内の敷石下は黄褐色の地山である。

側壁の石積は下に大きな石を置き、順次上に向って石は小さくなる。基本的には5段積みであるが、一部4段もみられる。奥壁は両側壁ではさむ形で造られ、最下部は1枚石を据え、その上に小さな石を置き4段に積み上げている。側壁は直立し持送りはみられない。むしろ最上部に近い部分は両側に広がっている。玄室天井石は4枚みられ、羨道部の天井石は取除かれているが、2枚置かれていたとみられる。

副葬遺物は玄室内床面から出土したものである。まず玄門付近で人骨の破片7個（大腿骨）と玄室

中央部や、玄門に近い敷石上より須恵器の杯1、その付近で丸玉6、小玉1、勾玉1、鉄刀子2、大刀鞘破片1と、中央部や、西よりに須恵器蓋1、銀環1が出土している。

3 出土遺物

出土副葬品を品目別にあげると、次の如くなる。

須恵器、杯の蓋1・杯の身1

装身具、碧玉製丸玉6・小玉1・ガラス製勾玉1・銀環1・ガラス製小環

武具、鉄刀子2・茎1・鞘破片2

これらの副葬品は量としては少ない。この特徴について記述する。

須恵器（第3図1・2）

蓋 天井は荒い箝切でロクロ成形、天井部から丸みをもって口縁にいたり、杯受口はほぼ直立する。胎土には多量の小砂粒を含み焼むらもある。焼成良好硬質、器面内面共青灰色を呈する。器形に歪みがみられる。口径10.6cm、高さ3.7cmで小形のものである。

杯、蓋受けの立上りは低く内傾する。受口基部から上方に上がり端部は丸味をもつ。底部は荒い箝切りで平底風であるが、中央部が高い。口径9.5cm、高さ3.5cm小形の杯である。焼成は悪く焼むらもみられる。硬質で灰褐色を呈し胎土には小砂粒を含む。

装身具

丸玉（第3図4～9）

すべて碧玉製で、径が1.2cm内外の球形で側面は切取りがあり、その中央に径0.3cmの穴がある。風化されたものが多く全体的に造りは上等とは言えない。色は黒緑・白緑・青緑の3色である。

小玉（第3図10）

硝子製で蓝色、径0.6cmの球形の側面を切り取り、中央に径0.15cmの穴がある。や、歪みがみられる。

勾玉（第3図11）

硝子製で黄白色を呈し、や、透明で先端部が一部破損している。径0.7cmと小作りで、上部の穴は片方から穿たれている。径0.15cmである。この勾玉は古墳時代後期に出土する勾玉の特徴をもつコの字形を呈するものである。

銀環・硝子環（第3図3・12）

銀環は1個のみで、長径3cm、短径2.6cm、環の直径0.7cmである。中実鉄地銀銅張りである。硝子環は緑色を呈し、径0.6cmで直径0.15cmの環で耳飾と考えられる。

武具

鉄刀子（第3図14・15）

2本出土している。共に柄部は破損している。刃渡り5cmと5.5cm、中央部の幅は共に1.5cmである。
ほかに茎1も出土している。

大刀鞘（第3図13）

鞘の破片で、つばに近い一の足の部分とみられる。腐蝕がひどい。

4まとめ

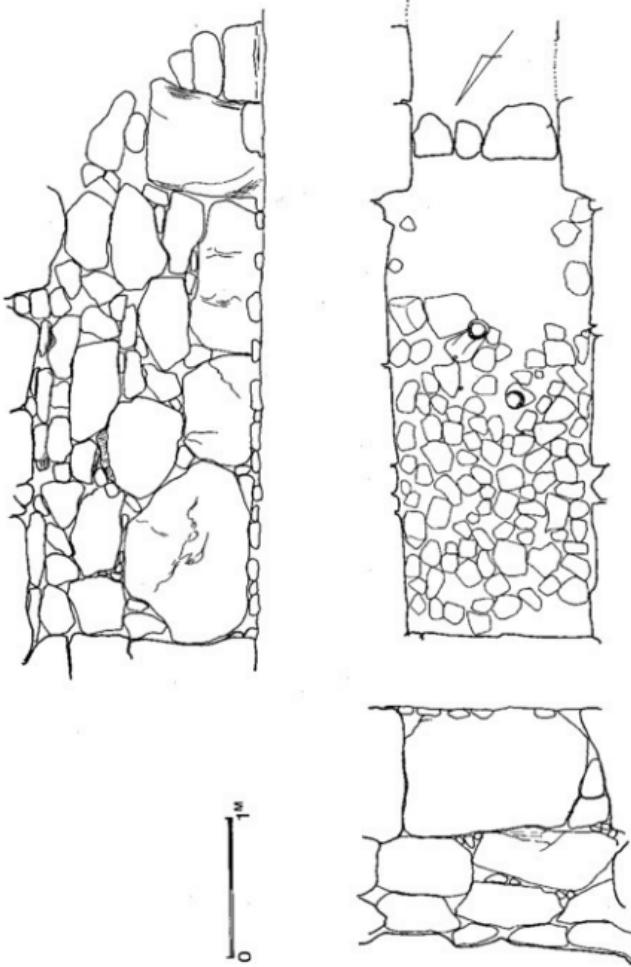
両袖の横穴式石室で、玄室は奥壁下の幅と玄門部の幅は、後者がやや広く形では台形に近い。両袖は形式的に広がる程度である。羨道の先端部は切取られているが、割に長い羨道とみられる。玄室と羨道を区画する枕石はやや羨道をはいった所に置かれている。玄室西側壁下は直線的であるが、東側壁下は玄門近くでややふくらみを持たしている。玄室の長さは奥壁の2.5倍に作られており、玄室幅指数41・羨道幅指数は76である。両側壁とも持送りは見られず、むしろ上部天井に近い部分が広がるほどである。石積みはしっかりと仕上げである。

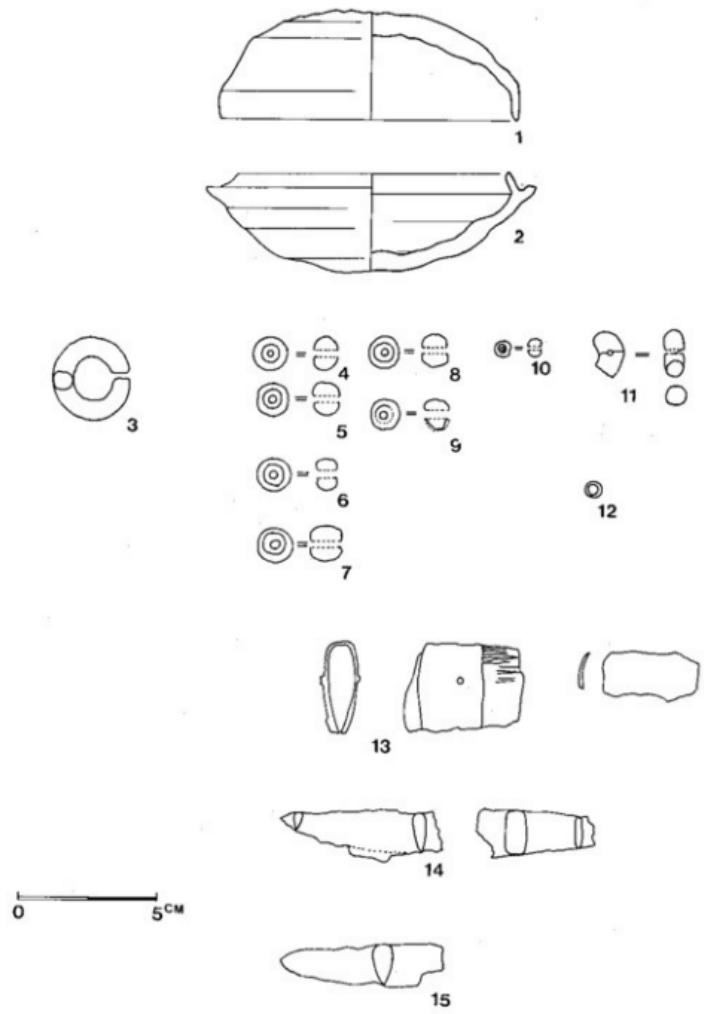
副葬品は量的には少ない。出土の須恵器は蓋杯とも器形に歪みがみられるなど、焼成の仕上も悪く、日常用具としては粗末なものである。むしろ葬送用具とみることもできる。次に「コ字」形につくられた小形の勾玉も、先述したように古墳時代後期の特徴をもつものである。以上石室の造り、須恵器、勾玉などの副葬品から考えても、本古墳の築造時期は7世紀前半であるとみられる。

本古墳から数少ないが、人骨破片が出土しているが、湿度の高い高知県でも、石室内の排水がうまくいけば、人骨が少破片でも残る事が確認出来た事は有意義であった。

(廣田典夫)

第2図 1号煉石室実測図





第3図 1号墳出土遺物実測図

IV 枝川2号墳

1 所在地の現状

所在地 伊野町枝川2111番地

1号墳と同じ枝川琴平山の南斜面に、1号墳とはゆるい谷を1つ挟んで、ほぼ同一の標高で南西に開口する両袖の横穴式古墳である。

漢道直前は、わずかの山道分を残して宅地造成のため切り下げられて崖状となり、墳丘は本来あまり突出したものではなかったのであろうか削平されて水田となり、墳丘は全く形状を止めず、山道に作られた芋穴といった景観である。

以前から開口し、利用されて来たらしく、床面は、枕石上面とほぼ同じレベルで平らになり、水田の水であろう水滴が天井から時々落ちている状態であった。

2 石室の構造と遺物出土状況（第4図）

前述のような諸条件のせいであろうか、昭和40年頃までは正常であった漢道の天井石の1つの根本が崩れ、天井石がずれ落ちはじめ昭和45年頃には、漢道入口を半分以上塞ぐようになり、安全上の問題もあることから、発掘調査を行うに至ったのである。

石室は、南西に開口した両袖式横穴式石室であり、琴平山周辺に散在する珪質砂岩の自然石を積み上げたもので、奥壁下部に大きい1枚石を置き、順次石を積み奥壁とし、それを挟む形で側壁が造られている。（第4図）

側壁は、1段目にはほぼ四角形の大石を置き、順次小さな石を積み上げた四段積みで、各段の高さ合わせにかなり心が配られている感じであり、側壁、奥壁共に壁面はほぼ垂直である。

石室の天井は、5枚の大石で覆われ、天井高170～195cmで玄室中央部が最大で玄室は長さ330cm、幅175～200cm中央部が最大で、奥壁に向かってややすばまって梅形といった印象である。

漢道部は、長さ280cm、幅130cm、天井は玄門部で一段下り、天井高120～130cm、崩れ落ちた天井石を除いて、3枚の天井石が残存している。

調査は床面に15～20cm程残っている土を取り除き、床面を確認するという程度の事であり、経過と共に、直径8～10cm程の河原石が散見されたが、本来床面に敷かれていた可能性はあるものの明確には判定されなかった。

擾乱のため、遺物の残存も期待されなかつたが、それでも小破片ながら、須恵器5点（杯身2、同蓋2、越口縁部1）と鉄鏡片1が出土した。

3 出土遺物

須恵器、いずれも小破片であったが、器形を推定すれば次の通りである。

杯身、共に小型で薄く、焼成も良好な方ではない。器形は浅く、たちあがりは内傾し最も低くなり、蓋受けの作りだしも鈍く、最も後退した様相を示している。(第5図1~2)

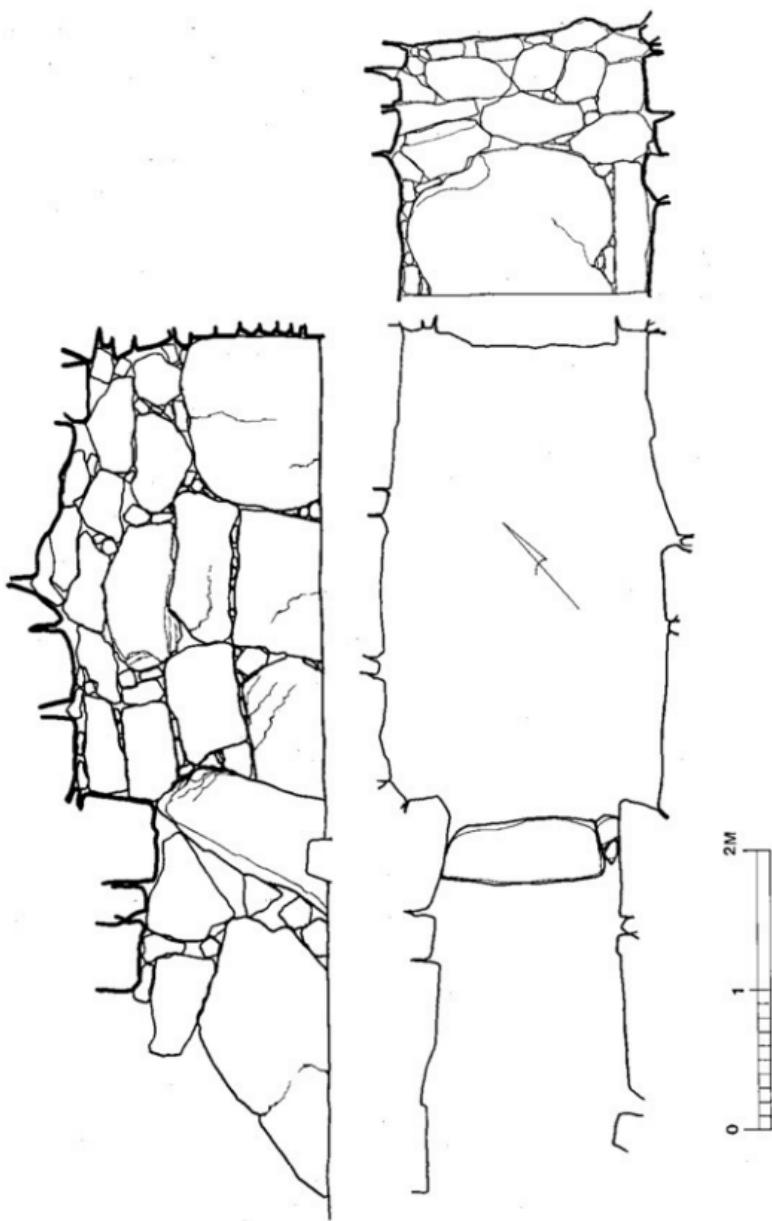
杯蓋、共に上記杯身と同様に、浅く、弱々しい作りで最も後退した様相を示している。上記の杯身と対になるか否かは不明である。(第5図4~5)

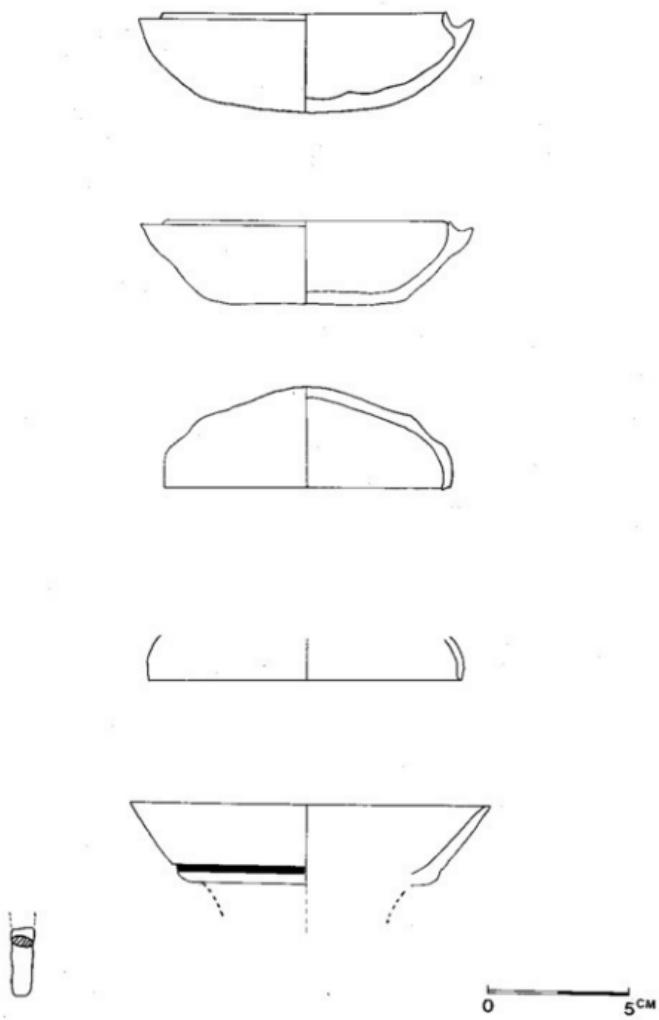
甌、口縁から頸部までの部分のみで他は欠失している。頸部の境界に1条の太い凹線を施している。(第5図5)

鉄鎌、基部の残片で、全体の形の推定は困難である。(第5図6)

(片岡鷹介)

第4図 2号横石室実測図





第5図 2号墳出土遺物実測図

V 枝川3号墳

1 所在地と現状

枝川3号墳は、枝川2号墳の存在する丘陵の西側で、琴平山（標高147m）から南西に延びる尾根の端部傾斜面にあり、枝川古墳群のなかで西端に位置している。

古墳の埋葬施設は、南面に開口する横穴式石室である。現状では、北側に忠靈塔の敷地が、北東及び東側に民家が接していて、石室の羨道部の一部は、民家に通じる石積の階段及び忠靈塔敷地の石垣に再利用されているが、玄室部は良好に遺存している。古墳周辺の状況から、墳丘は残存せず、規模及び墳形については不明である。古墳の所在地の地番は、伊野町枝川板屋2231番地であり、本古墳については、伊野町指定文化財（史跡）として保護措置が講じられている。（第6図上）

（土佐電鉄「枝川」停留所下車。停留所北東の丘陵を登り徒歩3分。忠靈塔入口傍。）

2 石室の構造と遺物出土状況

（1）古墳の調査

枝川3号墳の石室については、早くから開口していたことが知られていたが、未調査の古墳であり、具体的な調査による解明が待たれていた。昭和56年に、枝川古墳群の保護措置を進める作業の一環として、古墳についての基本資料の整備を実施することが具体化され、枝川3号墳についての発掘調査が実施された。調査は、同年2月13日～19日・11月11日～14日の間に主として横穴式石室玄室の清掃作業及び石室実測作業が行われた。

① 発掘調査の内容

玄室内には、流入堆積した土砂が約60cm積もっており、堆積土を除去しながら、玄室床面の確認作業を行った。玄室内堆積土は、10層に区分され、地山層を加えて11層からなる層序を認めることができた。（第6図中）

玄室内堆積土のうち、第2層暗黄褐色粘質土～第5層赤茶褐色粘質土上層部からは、土師質土器片・近世～近代陶磁器片・古錢（寛永通宝2枚）が出土した。室町時代及び江戸時代～明治時代前半に属するこれらの出土遺物は、石室が再利用されていた状況を示すものであると考えられる。

第8層～第9層の上面にかけては、古墳に関連する遺物（須恵器）が出土し、小礫が散在して検出された。小礫は、10cm前後であり、奥壁部に集中してみられた。この小礫は、検出状況から、敷石であると考えられるものであり、後世の擾乱による移動を考慮すれば、当初はもう少し敷きつめられていた可能性がある。小礫の検出面の下層は、第9層及び第9'層の黄茶灰色粘砂土をはさんで、第10層地山層となっており、小礫（敷石）の検出面が床面であると考えられる。なお、玄室中央部では、

20~30cm前後の石が集中して検出され、周辺からは、遺物の出土が多かった。棺台の可能性もあるが、一部の石の下から遺物が出土し、元の位置であるのか疑問が残る。また、遺物は玄室中央部から玄門部にかけて集中して出土しており、出土範囲のなかで置かれていたものと考えられる。

② 横穴式石室

埋葬施設は、南に開口する横穴式石室で、開口方向は尾根の派生方向よりや、南に位置している。長方形の玄室に羨道を付設したもので、東壁に袖部をもつ左片袖の横穴式石室である。石室奥壁は大型の石材を配置し、その上方に横長の小型の石材を並べ、石材間に生じた空間に巨大の石を配置している。側壁は基底に大型の石材を並べ、それより上方では横長の中型の石材を並べている。持送りは、3段目以上から内に傾けて送っているが、右側壁（西壁）では、左側壁にくらべて持送りの度合が強い。奥壁部では、石室幅170cm、天井部幅120cmを測る。

袖石及び袖石北側の石材は縱に設置しており、また袖部（玄門部）の天井石の外面は、加工した痕跡がみられる。なお、天井石は3枚の大形石材を構築している。玄室の規模は、奥壁幅160cm、玄門部での幅175cm・玄室最大幅177cm・袖石幅43cm、玄門幅140cm、玄室320cmである。玄室奥壁部と玄門部では約10cmの高低差があり奥壁部が高い。地山層である第10層黄褐色砂礫土は、南に傾斜しており、その上に第9層、9'層の黄茶灰色粘砂層が堆積している。石室の石材は、珪質砂岩が使用されており、枝川1号墳・2号墳と同質の石材である。なお、玄室の調査においては排水溝は確認されなかった。

(第7図)

3 出土遺物

出土した遺物は下記のとおりである。

第2層～第5層上層部……土師質土器（椀）

近世～近代陶磁器（碗・皿・壺・瓶）

第8層～第9層……須恵器（杯・高杯・平瓶）・不明鉄器（図版15の下左）

第8層～第9層から出土した遺物は、枝川3号墳に併す副葬品である。杯蓋2・杯身1・高杯2・平瓶（口縁部1・胴部1）・不明鉄器1であり、平瓶及び不明鉄器を除いて遺物の遺存度は良かった。遺物のなかで、不明鉄器については鉄錠片とも考えられるものであるが、細片のうえ錠の度合が著しく、膨張した形状を呈しており、旧態を推察できないものであった。

須恵器（第8図1～6）

1・2は杯蓋、3は杯身である。このうち、1と3については、セット関係が考えられる。杯は、いずれも天井部について回転ヘラ削りを施さず未調整のままであり、その他の部分はロクロナデ調整を施している。高杯（4・5）は、無蓋高杯と有蓋高杯がそれぞれ1点出土している。4・5とも2方向の2段透し孔を有する。6は、平瓶口縁部と考えられるものであり、図示しなかつたが、その他に胴部が1点出土している。

4 まとめ

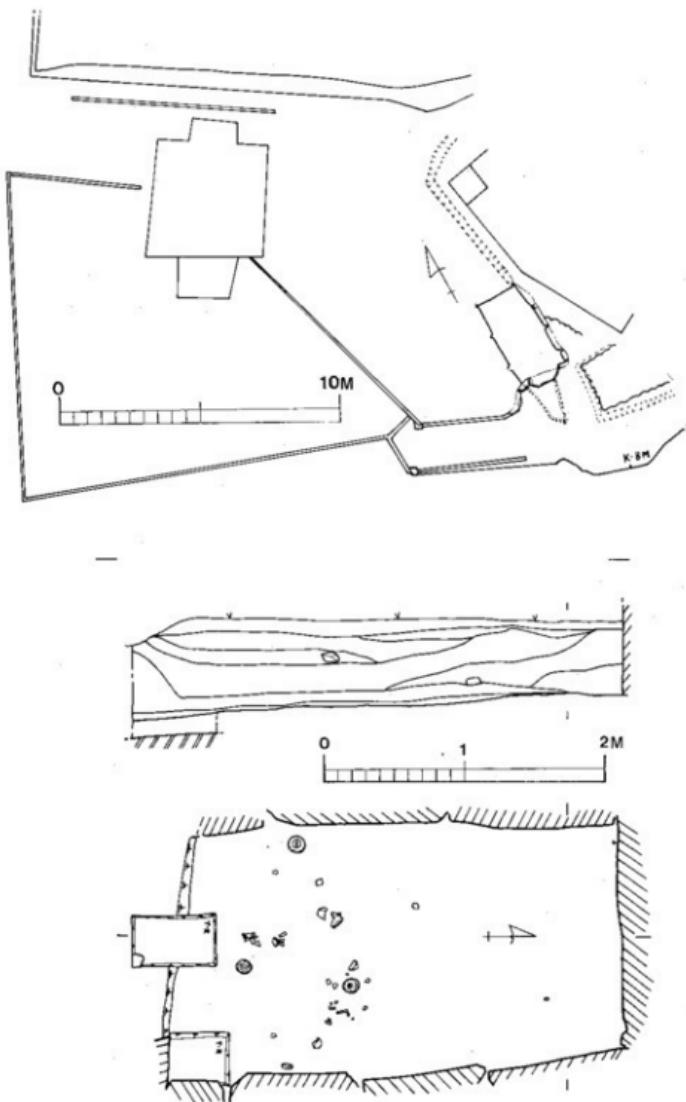
昭和56年に実施された発掘調査において、枝川3号墳に関する具体的な知見が得られ、枝川古墳群についての総合的な検討を行うことが可能となった。

枝川3号墳の出土資料で、須恵器に関しては、陶邑・高藏209号窯跡出土遺物に形態が類似しており、遺物を通して本古墳に所属時期を与えるとすれば、6世紀末から7世紀に属するものと考えられる。ただ、須恵器のうち、杯1・3については全体的な形状から7世紀前半に属する可能性もあり、総体的に6世紀末～7世紀前半に所属時期を求めたい。この場合、追葬の時期を考慮すれば、枝川3号墳は6世紀末以降に築造され、7世紀前半においての追葬が行われたものと考えたい。発掘調査については、玄室の調査であり、羨道部の調査に及んでいないため、追葬時期等全体的な問題点については、将来補足される必要がある。

枝川1～3号墳を通して3号墳を考えてみれば、枝川3号墳と枝川2号墳について、使用石材、石室の形態から多くの類似点が見られ枝川2号墳の被葬者との関係がうかがわれる。ただ、古墳の位置からは、枝川1～3号墳を包括的に扱うことが可能であり、石室の形態の相違が被葬者の性格によるものなのか、古墳を築造した技術者集団の問題であるのか、今後検討すべき課題である。

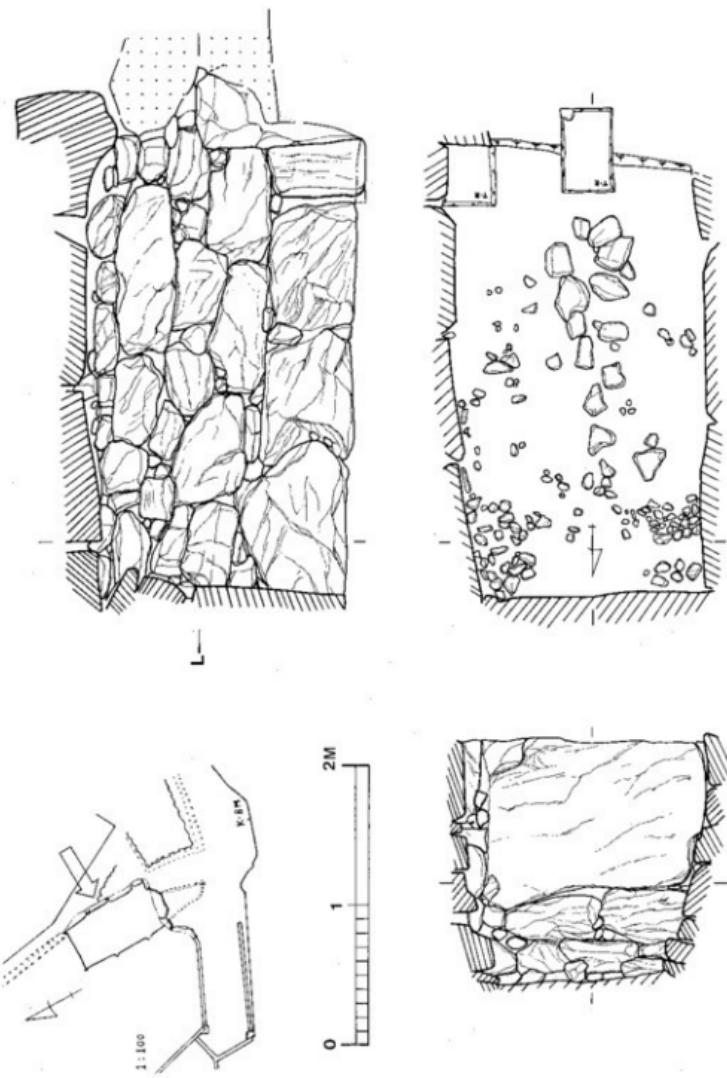
(山本哲也)

註 田辺昭三「第3章 須恵器生産の展開」(『須恵器大成』昭和56年 角川書店)

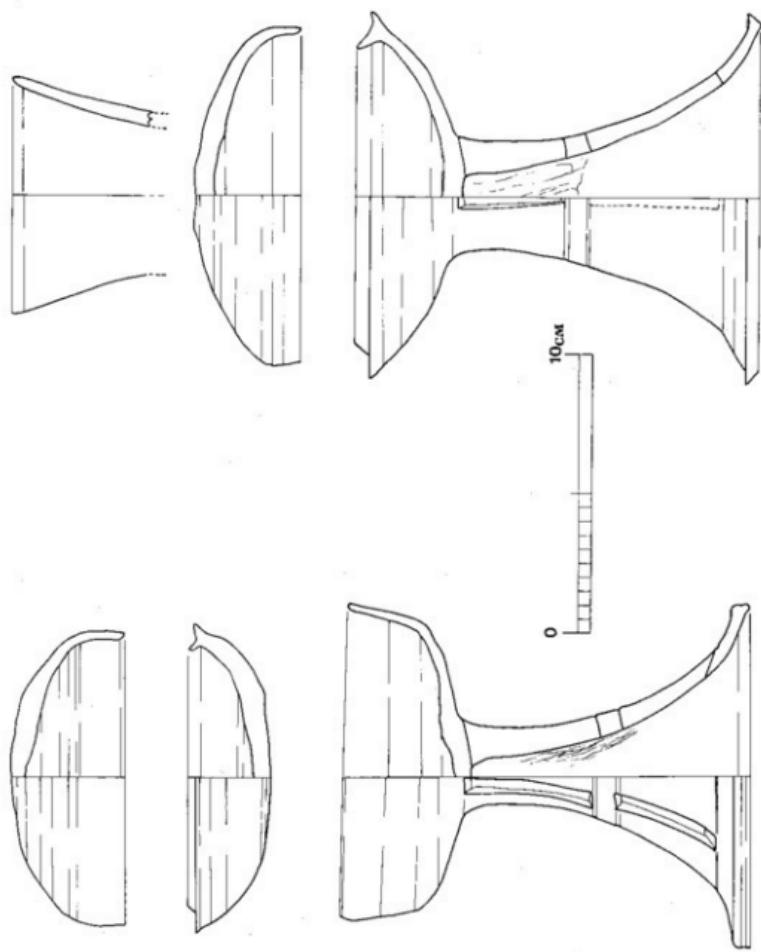


第6図 3号墳遺物出土状況

第7圖 3號塘石室實測圖



第8図 3号墳出土遺物実測図



VI 総 括

1 古墳群の年代

枝川古墳群の各号墳について1部では重複する点があるが、出土の須恵器によってその年代を推定してみよう。ここで須恵器の年代を推定する1つの基準として『須恵器大成』¹⁰⁾を使用した。1号墳では須恵器の杯と蓋が出土している。この1号墳出土の杯と蓋で最も近似するものは陶邑・高倉217号窯跡出土のものである。2号墳は須恵器の器種は1号墳よりも多い。2号墳の須恵器杯(No 1)は、これも高倉217号に近く、いま1つの杯(No 2)は3号墳出土の1の杯に全く同様のものとみられる。2号墳では開いた口縁部を持つ甌がある。このような口縁部の著しく発達したものは群集墳が後世期以降も残る地域には、このような器形を製作し続ける事があるので、これをNo 1の杯と同期に考えてよくはなかろうか。よって1号墳は出土の須恵器で見る限り7世紀前半代にその年代をおく事が出来るし、2号墳も7世紀前半、そして甌があるいは可能性として6世紀末~7世紀初頭に遡る事もあり得る。3号墳については山本哲也君が述べているように、その年代は6世紀末~7世紀前半に位置付けてよからう。以上各古墳の年代を表にすると次の如くなる。なお各号墳とも発掘によって明確になった事であるが、それぞれ盗掘を受けていて、出土遺物の大半が亡失している事を付加しておきたい。さらに各号墳には円形の墳丘が存したのであるが、これも長い年月で削除や流失してしまったと考えてよい。ただ1号墳にはその痕跡が残っている。

各年号	年 代	AD 500	AD 600	AD 700
1 号 墳			—	
2 号 墳			—	
3 号 墳			—	

2 各号墳の横穴式石室

各号墳の石室実測図をみて感ずる事であるが、横壁、あるいは側壁の石の積み方は全く同一と言ってよい。ただ言える事は2号墳が心持ち玄室が広く、玄室の高さが高いこと、1号墳の玄室・羨道の幅が小さいことである。

さて、ここで1号墳と2号墳の石室を比較して羨道部を失っている3号墳がどちらの石室に近似するかと言うと、3号墳の石室は2号墳に近いと言えるであろう。よって本古墳群の3基のうち、1号墳の横穴式石室がややその型態が特異と言つてよい。ではその特異性はどのような点であろうか。筆者は次のような点を挙げる。

- A 石室が一般的なものと比して小型である事。
- B 調道部の幅が玄室の幅に比して広い事。
- C 被葬者が1人ないし2人位に限定される大きさの石室である事。 以上の如き特質を持つ1号墳の横穴式石室に類似するものとして南国市舟岩古墳群中の4号墳を挙げる事が出来る¹¹。そしてこの4号墳から出土した須恵器の示す年代は7世紀前半におさえてよいものである。7世紀前半に築造される古墳について筆者はこれを後Ⅱ期の古墳とする。そうすると後Ⅲ期に築造される横穴式石室はこのような型態を取るのであろうか。これに関連して高知県の後Ⅰ期（6世紀前半）の横穴式石室の型態は廣田典夫君が発掘した南国市蒲原山東2号墳¹²を例として挙げる事が出来る。そして後Ⅱ期の（6世紀後半）に築造された古墳として南国市岡豊町小蓮古墳¹³を挙げ得るのでなかろうか。なお本古墳群の2号墳・3号墳の石室の型態は後Ⅱ期のものとしてよからう。それはその築造が6世紀終末であることによる。

3 仁淀川水系における古墳群

古墳群として枝川古墳群を見る時、それは後Ⅱ期的であると言える。かつて筆者らが中心で調査した土佐最大の古墳群である舟岩古墳群は6世紀後半を中心とする後Ⅱ期の古墳群¹⁴と言ってよからう。この2つの古墳群を対比せしめると、土佐の群集墳のピークは6世紀後半に、そして枝川古墳群は6世紀終末以降の衰退期に入った所で築造されたものと言える。そしてその点で枝川古墳群を後Ⅲ期的古墳群とみる。

枝川古墳群に葬られた古代家父長家族の人たちの住地はどこであろうか。この人たちの住地はその畿門の方向や付近における平野やあるいは従来からの出土遺物を根據にして求めなければなるまい。以上の諸点を総合すると、その住地は伊野町サジキを中心とする宇治川流域平野にこれを求めなければなるまい。サジキ遺跡では枝川古墳群出土の須恵器よりも古いⅠ期の須恵器類が発見されている¹⁵し、将来は古墳群出土の須恵器と同期のものが発見される可能性が強い。

枝川古墳群が仁淀川の支流宇治川流域平野に在る古代家父長家族の墳墓とすると、本古墳群は広い意味での仁淀川水系の古墳群として把握してよからう。仁淀川水系のいま1つの古墳群として仁淀川下流における一支部波介川の流域に股々谷古墳群がある。股々谷古墳群は2基の横穴式石室墳からなる。筆者が実見したこの古墳群出土の須恵器に無蓋高杯があり¹⁶、その年代は7世紀前半とみられる。その点で股々谷古墳群は未発掘ではあるが、枝川古墳群と同様に後Ⅲ期の古墳群と把握してよからう。

仁淀川水系にはこの他に1基ずつ存在する2基の古墳も発見されているが、これらは古墳群を形成せず、また出土須恵器も明確でなく、その年代を明瞭にする事は出来ない。結局仁淀川水系では枝川古墳群と股々谷古墳群が存するに過ぎない。この2つの古墳群は香長平野における古墳群と比較すると、その景においても劣るし、また年代においても後出的である。これは仁淀川水系における平野の農業生産力が香長平野のそれに劣るし、農民層の分解が香長平野に比して遅れた事による事は当然の事である。

（岡本健児）

- 註 (1) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 昭和56年)
- (2) 岡本健児『高知県舟岩古墳群』(『高知県文化財調査報告書』15 昭和43年)
- (3) 廣田典夫『高知県蒲原山東1号・2号古墳の調査概報』(『高知県文化財調査報告書』22 昭和54年)
- (4) 廣田典夫『高知県南国市小蓮古墳』(『古代学研究』65 昭和47年)
- (5) 註(2)に同じ
- (6) 岡本健児『古墳時代の農村』(『伊野町史』伊野町 昭和48年)
- (7) 岡本健児『黄泉国と古墳の築造』(『土佐市史』土佐市 昭和53年)



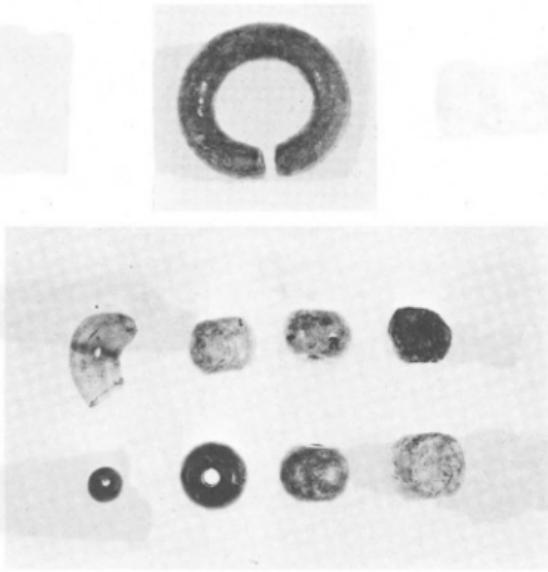
図版1 1号墳全景



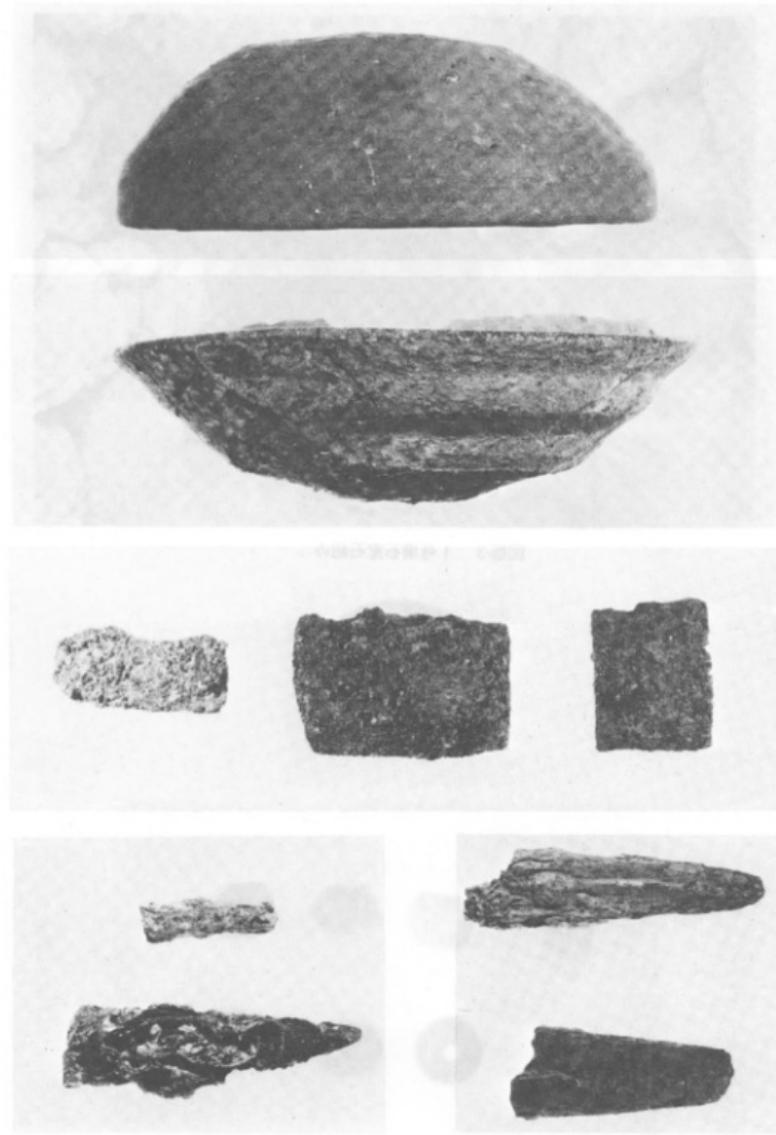
図版2 1号墳入口



図版3 1号墳石室石組み



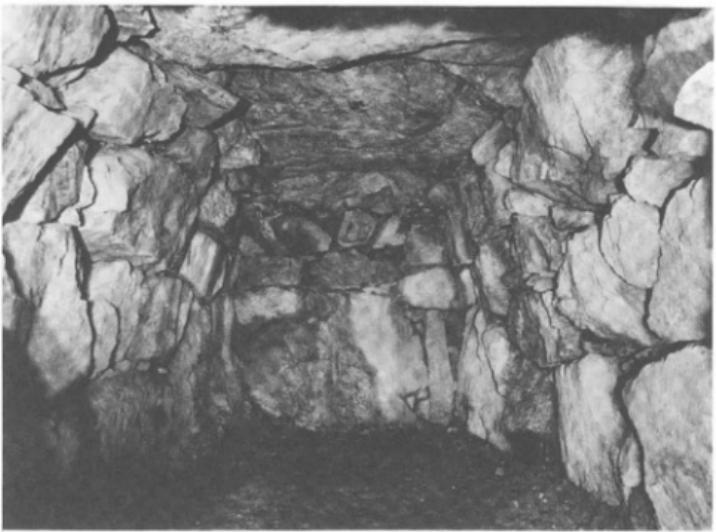
図版4 1号墳銀環及び玉類



図版5 1号墳須恵器及び鐵器



図版6 2号墳全景



図版7 2号墳石室石組み



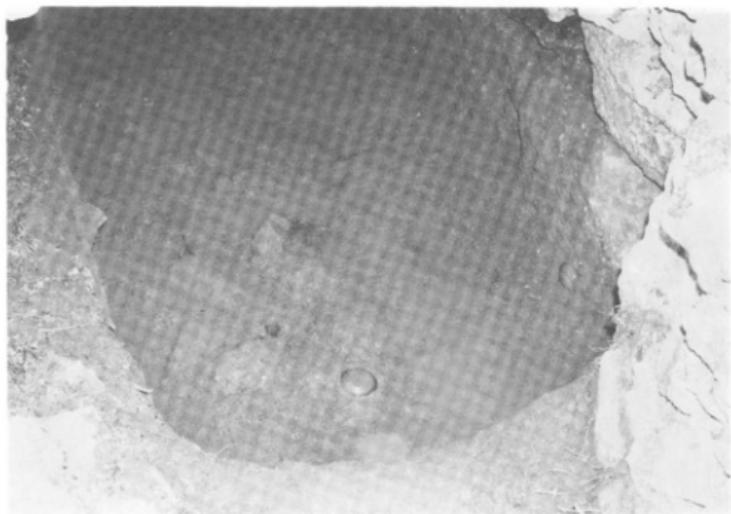
図版 8 3号墳全景



図版 9 3号墳石室石組み



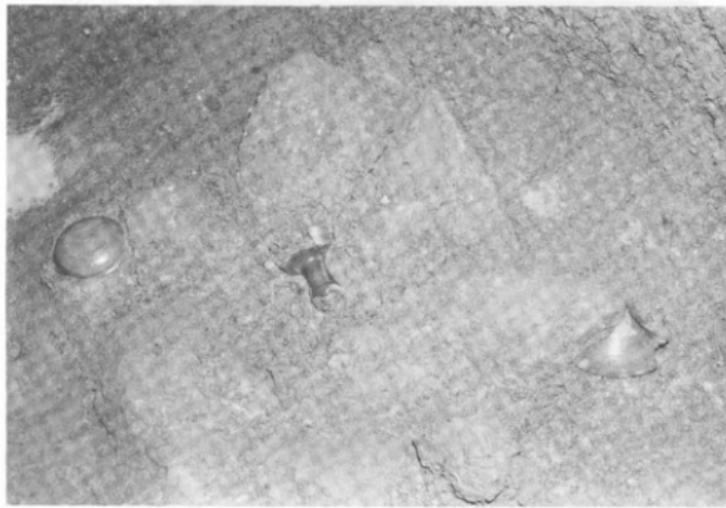
図版10 3号墳玄室調査状況



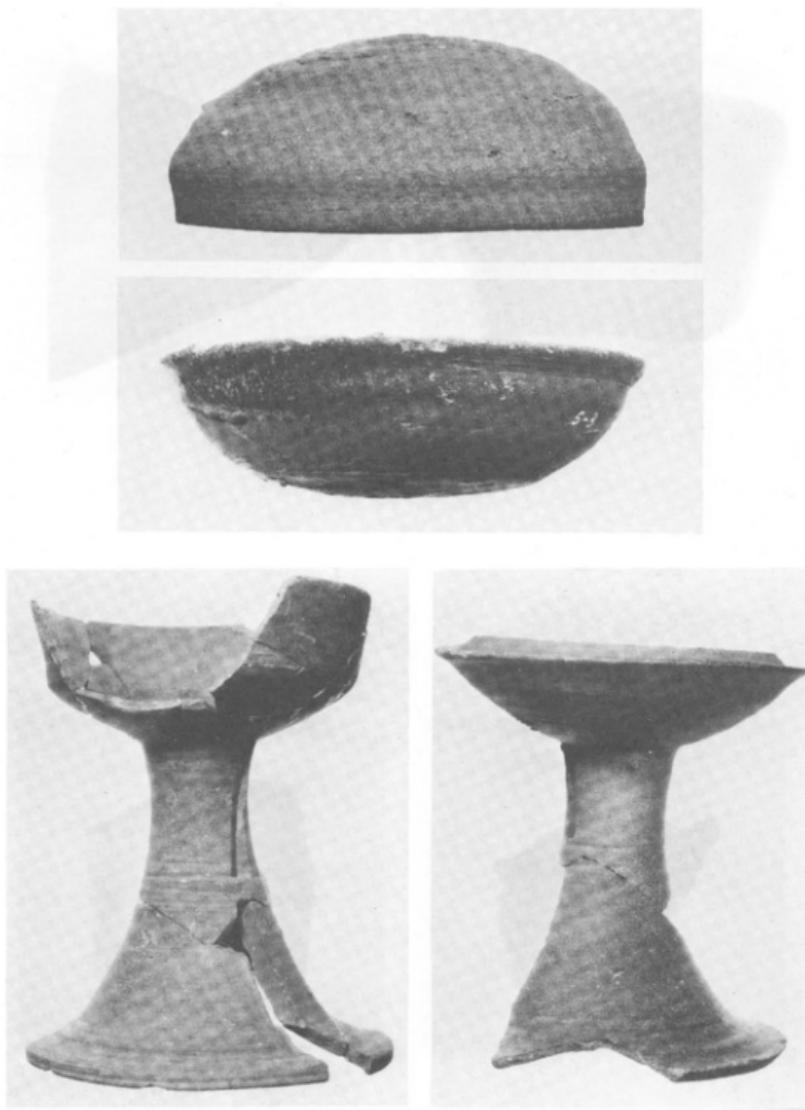
図版11 3号墳玄門部遺物状態



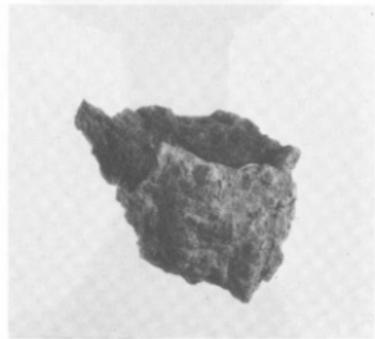
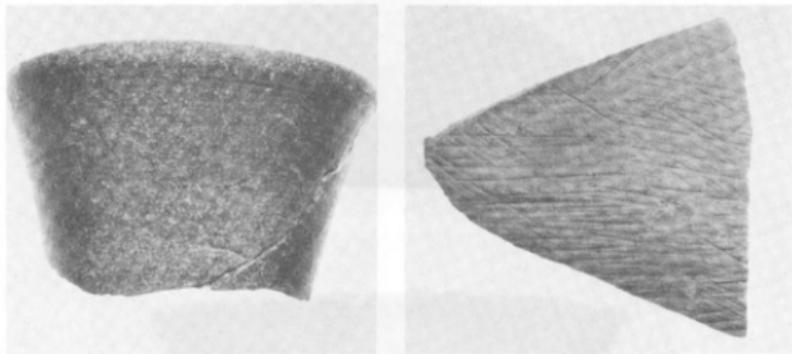
図版12 3号墳玄門部遺物状態



図版13 3号墳須恵器出土状態



图版14 3号填须器



図版15 3号墳出土遺物